# しんらん講座だより

-SHINRAN LECTURE NEWS-

VOL.6

発行所：長浜・五村別院
長浜市元浜町３２－９
代表者　宮戸　弘
編　集：両別院教化推進委員会
お問い合わせ：
長浜：０７４９（６２）００５４
五村：０７４９（７３）３１３３
FAX：０７４９（６２）０７５４
MAIL：
shinran.lect@gmail.com

## 二〇二一年度 第二講要約（三月十五日）

講師・訓覇浩氏

### はじめに

今年度第二回のしんらん講座となります。今回も最初に前回の質問、感想について触れさせていただくところから始めていきたいと思います。

ご質問の中に、国土建立という事についてございました。ご承知のように、『大無量寿経』に説かれる法蔵菩薩の四十八願の初願は、国土建立の願と呼ばれております。「設我得佛、国有地獄餓鬼畜生者、不取正覚」という願ですね。『大無量寿経』にも異訳があって、願の数も違いますし、内容も異なるものがあります。しかし、初願は、共通しているのですね。その意味でも、この国土建立の願い、というのは、法蔵の願いの礎にあるものといってよいのではないでしょうか。そしてご質問にある、国土とは一人ひとりが建立するものなのでは、ということですが、私は国土建立はあくまで、仏のはたらきであると思います。その建立された国土に誕生させていただく。そして誕生するものの責任として、阿弥陀の国を自らの本国として、この濁世を生きる、担うということが出てくるのではないかと思っております。

それからもう一つ、人間を回復できていない私たちは、いつ、どのようにして、ハンセン病回復者の人たちと響存できるのかというご質問ですが、私は、その問いが発せられた今、すでに、響存ということが実現しているのだと思います。

響存とは、横並びの関係ではなく、向き合いの関係だと思います。回復者の存在、苦悩に向き合い、その問いかけの声を受け止めようとする姿が、また回復者の方に力を与えていく、そのような往復の関係そのものが、すでに響存という在り方なのではないかと思います。

### 「非戦」ということ

それでは、本題に入っていかねばなりませんが、今回は当初の筋書きを変えて、今まさに起こっている戦争、ロシアのウクライナ侵攻ですね、この事から「非戦」という事について、非戦を貫いた僧侶、高木顕明の事績から少し確認しておきたいと思います。

高木顕明は大谷派の僧侶で、非戦と平等を貫いたがゆえに、一九一〇年に起きた「大逆事件」に連座し、獄中で命を失った人ですが、その著作である「余が社会主義」の中で「極楽世界には他方の国土を侵害したと云う事も聞かねば、義の為に大戦争を起したと云う事も一切聞れた事はない。依て余は非開戦論者である。戦争は極楽の分人の成す事で無いと思うておる」という事を言い切っています。これはすごく大きい事です。国全体が戦争に突き進んでいく。戦争賛美の価値観で国が支配されていこうとする。その真っ只中ではっきりと、「余は非開戦論者である」と言い切っていくのです。私は、極楽という世界、単に、争いがない、平和で穏やかな世界、あぁ極楽、極楽というようなですね、そういう世界とは違うと思います。まぁ当然ですが。戦争は極楽の分人のなす事ではない。阿弥陀の国の住人は戦争をしないと言い切るわけです。『大無量寿経』の言葉で言うなら、「兵戈無用」と言い切る。そして、さらに「義」も否定するわけです。戦争に大義を与える事も否定する。義のためにという、その義をも否定していく精神。むしろこの義を否定するという事がとても大きな事なのではないかと感じます。戦争そのものの絶対否定です。まさしく非戦です。そうすると、「非戦」ということは、単なる戦争がないという状態を表す言葉でもなく、また戦わないという行為を表す事でもない、戦争の絶対否定、そうなるとそれは生き様です。戦争



## しんらん講座に参加して みんなの声

▼ロシアのウクライナ侵攻で、今の世にどうしてこんな事が起きてしまうのか理解に苦しみます。かつての日本の大戦やハンセン病患者への隔離政策にも繋がるように思います。一方で、戦時下において戦争を絶対に否定して、毅然として非戦を訴えた先達の生きざまに共感します。非戦と不戦の違いが分かりました。

▼水平社宣言百年の節目の年に、全国水平社の創立が、親鸞聖人の思想から生まれたものである事を初めて知りました。西光万吉さんや阪本清一郎さんはじめ、当時の指導者がどのように聖人の教えと出あわれたのか、水平社宣言にどう結びついたのかを知りたいです。

▼戦争や部落差別、ハンセン病差別など社会のさまざまな問題を、今までは自分の事として考えてきませんでしたが、仏さんのまなざしで問題を見つめることで、問題を課題として捉える事ができました。これからも自分の問題として、考え続けたいと思います。

▼「救済」という言葉を使って、真宗大谷派は、国のハンセン病患者隔離政策を補完するために、「隔離は救済である」として差別を正当化した事を知りました。時代背景があるとはいえ、教団に長いものには巻かれろ的な体質があるのなら、残念な事だと感じました。

▼私の目は外にばかり向いていて、なぜお寺で差別の問題を学ぶのか、長らくはっきりしないままでした。が、今回の講座での「徹底した自己凝視」「差別してやまない自らへの悲しみ」「差別されるもの、差別するものが共に解放される世界」というお話から、これはまさに信心の課題であり、解放されるべきは、差別してやまない私なのだといただきました。

※紙面の都合で、すべてのご意見やご感想が掲載できないことをお詫びします。

## 編集委員のひとこと

▼ハンセン病隔離、アイヌ差別、水平社宣言。講座を通じて学ぶなかで、問われているのは私自身であることに気づきます。私は赤表紙と新聞の間に正しく身を置いているだろうか。

コロナ禍やウクライナ侵攻など、人間社会の在り様が揺らいでいる今、テーマにある私たちが本当に生きたいと願う世界はどこにあるのかを、これからも皆さんとともに問い続けたいと思います。（S）

## しんらん講座

今後の開催予定

講師　訓覇浩師

③五月十七日（火）
会場　長浜別院

④六月十五日（水）
会場　五村別院

＊十三時受付
＊十三時半～十六時

＊日程は状況により変更・中止になることがあります。

というものを絶対否定する生き方、それが「極楽の分人の生きざま」だと顕明は頷いたのではないでしょうか。今回のロシアの侵攻に対しては、宗派も声明を出しておりますが、私は改めて高木顕明の生き様に照らして見る必要があるのではないかと思っております。

## 水平社創立百年

そしてもう一つ、今回取り上げないわけにはいかないのが、今年三月三日が、水平社創立百年という大きな節目に当たる日であるという事です。全国水平社の創立とその精神については、これまでも折に触れて話題としてきましたが、今日は少しまとまった形で紹介させていただきたいと思います。

今からちょうど百年前の一九二二年三月三日「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉で結ばれる「水平社宣言」を採択し、全国水平社は誕生しました。それは「部落民自身の行動によって絶対の解放を期す」と「綱領」に謳われているように、部落差別を受けてきた人たち自身による、はじめての自主的、自立的な部落解放運動の始まりでした。「呪はれの世の悪夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は涸れずにあつた」「人間を尊敬する事によつて自ら解放せん」という「宣言」の言葉や、「吾等は人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向つて突進す」という「決議」の一文が表すとおり、水平社は、差別によって奪われた人間としての誇りを獲りもどす事を基盤に、差別への怒りと悲しみ、そして人間解放への希求が結実したものであると言えます。

この水平社創立の精神の底に流れているのが、親鸞の教えであると受け止められております。水平社創立メンバーの中心であった阪本清一郎は、水平社がどこから生まれたのかという問いに対して「云ふなれば、親鸞の思想から生まれたと云はれる可きものです」と述べ、同じく米田富は、「親鸞の流を汲む穢多の子よ、水平運動のため健在なれ」と叫び、西光万吉は、「水平運動を見る人よ、業報に喘ぎつゝ白道を進む人間の姿を見よ。善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人を、の世界に於いてのみ、吾等は抱き合うことが出来る」という言葉を刻んでおります。

このような親鸞聖人の精神に生きようとした水平社同人たちのまなざしは、被差別部落の人たちの大多数をご門徒としながらも、差別的体質にどっぷりとつかる本願寺教団に厳しく向けられていきます。そこで問われたものは、根強く残る貴賤の意識、寺格や堂班といった差別制度、親鸞聖人を貴人化してしまうような宗祖観など、教団の根幹に関わるものばかりでした。その中でも、特に力が込められていたのが「解放の精神を麻痺せしむるが如き一切の教化運動を排す」（水平社第三回大会決議）という教学、教化の在り方に対する問いかけです。この問題提起は、水平社がなぜ創立されなければならなかったのかという、創立の必然性とも深く関わるもので、本紙でここまで確かめてきた、アイヌ民族に対する同化政策への協力や、ハンセン病療養所慰安教化活動の本質をも言い当てる、大変大きな問いかけであると言えます。

しかし、私たち大谷派教団は、水平社の創立から百年を経た今も、これらの問いかけに対して、真に応え得る教団であるとは言えません。同朋会運動が提唱されてからも、差別の問題に向き合う事と、信心の課題は別だという考えが公に語られ、さらには、教団の責任ある立場の人たちによる差別事件が相次ぎました。そのたびに、部落解放運動を闘う人たちから、「親鸞の精神に帰れ」という厳しい問いかけを受け続けてきたのです。水平社百年、それは、差別からの解放を願う人たちから、大谷派教団が問われ続けた百年でもあるのです。

水平社によって展開される解放運動は、「自らの焔に焼けつつ自らを打つ形相こそ水平運動の眞相であるのだ」という自身の運動を語る言葉からも窺えるように、徹底した自己凝視の上に成り立つ運動でした。そこから、差別されるもの、差別するものが共に解放される世界、すなわち、熱と光ある「人の世」が願求礼讃されていったのです。

「静かに己を悲しむ心より、真実の力は生る」。大谷派の解放運動の先駆者武内了温の言葉です。水平社百年を迎えた今、私たちに求められる事、それは、この差別からの解放という、



差別の現実から発せられる痛切な願いを、差別してやまない自らのへの悲しみとして受け止め、そして、あなたが解放されなければ私も解放されないというその願いを、この濁世において、同朋社会の顕現に向けて歩む私の力としていく事であると思います。

いま取り上げた、水平社からの本願寺教団への三つの問いかけ、「問われる差別的制度・貴賤の意識」「教学、教化の在り方」そして「宗祖観」ということについては、親鸞聖人の行実に照らして、次回以降触れることが出来れば、もう少しお話しさせていただきたいと思います。

## ハンセン病隔離政策と大谷派教団

それではもう時間もあまりありませんが、もともと今日お話ししようと思っておりました内容に入らせていただきます。前回、「隔離の時代」ということで、ハンセン病隔離政策がもたらした被害について、玉城しげさんの証言などを紹介しながらお話しいたしましたが、今回はその隔離政策に協力した大谷教団の歴史について、簡単にお話しさせていただきます。

真宗大谷派は、ハンセン病絶対隔離政策に、当初から積極的に協力してきました。国の隔離政策開始直後の『宗報』には次のような一文が掲載されています。

**国立の癩病患者収容所は此程東京府下に新設せられたる事なるが、世に最も憐れむべき境遇に在る此等の患者に対し、如来の慈光に浴せしめ、慰安を与ふるの必要を認め…彼の天平の頃、光明皇后の垂救の慈懐の事など偲ばれて尊し。**

**（真宗大谷派『宗報』1910年2月号）**

短い一文ですが、大谷派の取り組みが国策への応答であること、「憐れなもの」への「慰安」という質をもった「救済」、そして「皇恩」の強調と、その後長く続けられる「慰安教化」活動の特徴が端的に表されています。

ハンセン病隔離政策が国民に受け容れられたのは、そのひとつは国辱論ですが、それだけでは隔離政策の正当性を、国民にも、ハンセン病患者にも納得させる事は困難でした。そこで大きな役割を果たしたのが「隔離は救済」という概念です。国辱論からは生み出せないこの「救癩」という仮面を、隔離政策にかぶせるために不可欠であったのが、宗教のはたらきでした。その役割を積極的に担ったのが真宗大谷派です。療養所内外に、「隔離はハンセン病患者に対する救済である」ということを植え付けていったこの教化活動こそ、隔離の非道さに覆いをかける、究極の人権侵害であると考えます。このような宗教が隔離政策に果たした役割は、キリスト教の関係資料ですが、次の資料から浮かび上がります。

**「療養所は犠牲の礎の上に築かれた地上の楽園でなければならない。現世のすべての希望を絶たれた者に対して、私たちは最大の同情をそそがなければならない。自分からすすんで療養所に入る患者は、自分の養生のためばかりで行くのではない。祖国の血を浄めるために、人間最高の犠牲をあえてするのである。私はこうした人に対して社会は敬意を表すべきであると思う。わが復生病院は、…この犠牲にもとづいた楽園の建設に向かっては、他のどの療養所にも劣らぬ努力をしている。**

**（『祖国の血を浄化せよ』岩下壮一　一九三七年）**

## 最後に

最後に、ハンセン病療養所の中で隔離の四十年を生きられた大谷派僧侶伊奈教勝さんの言葉を紹介して終わらせていただきます。今回はお話の内容が予定と大きく変わってしまったことお詫びいたします。

「排除され、隔離された者が、運命共同体としての同歓同苦の心を結び、捨てられたもののみが持つ「世を捨てた」思いが、隔離の島を「楽土」としたいという悲願に生きたとしても責められることはない。そしてそこに足を運んだ人も、それを受け容れた人も、隔離を前提として、それを動かすことのできないものとしてうべなったことは覆うべくもない事実である。…真実の「浄土」とは、本当のものを知りうる智慧によって、本当のものが見えてくる世界のことである。排除して浄化された国土が、本当の世界であるとは考えられない。強制隔離をうたっている現行の「らい」予防法が改正され、失った人格をとりもどし、人権が確立し、「特別の人たちではない。普通の人たちとして友達になってほしい」のである。排除され、隔離された者が真に「人間回復」を成就するのである。その時、私たちにとって、ここが「浄土」となるのである。」

（『ハンセン病・隔絶四十年』伊奈教勝）